

～ セピア色の風景 ～

「農家の手」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

私の実家は、稲作の専業農家。昔にさかのぼるほど手作業の多い職業だった。

それゆえ親父の掌（てのひら）は、ゴアゴアとした分厚いものだった。きざみ煙草の火の玉をしばらく転がすことができたり、棘（とげ）もそう刺さるものではなかった。爪の伸び過ぎは、作業上危険なのでよく切っていた。指の小さな傷はしょっちゅうで、よく絆創膏（ばんそうこう）を巻いていた。

石川啄木の「はたらけどはたらけど猶（なお）わが生活楽（らく）のならざり ちっと手を見る」ではないが、作業の休憩時に親父が、しげしげと自分の手を眺めていたのを覚えている。「いかにも農家の手だなあー、この手があつから農家でぎんだー」などと…。家族総出の仕事が多く、子ども受け持ちの仕事もあり私の

手も「準」農家の手であった。わが家の息子は、兄と私の2人。兄は将来家督を継ぐことが宿命づけられており、「お前は家を継ぐんだ。家を継ぐんだ」と念仏のように言われた。私は、昔の次男三男のように財産分けしたら共倒れになるからと、「お前は家を出るんだ。家を出るんだ」とこれまた念仏のように言われた。さらに加えられた、「だから、学校だけは出してやる」との言葉と共に。その学校とは大学のことだと疑わなかった。私の手伝いは、わが手を使う「手」伝いだつたが、兄の手伝いは親父からの「技」伝いだつた。

私が家を離れて大学に入り、しばらくして帰省したときだった。ふと、親父がしげしげと私の手を見て言った。「あー、すげお（しげお）もこんなにちれい（きれい）に

なつてなあー、こんな手は農家の手ではねーな」と。その親父のつぶやきと、なんともいえない寂しい顔を思い出す。

そのとき、「次男として当然家を出て、無論農業ではない職業をしっかりと自分で見つけろ。しかし、農家の息子としての誇りは忘れるな。働くとは、汗水垂らして手を動かして稼ぐことだ」ということを忘れるな」という声が聞こえた気がした。

農家を出て柔らかい手になつて半世紀以上。情報などで儲けることに血が騒ぐことなく、古希を迎えた。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める